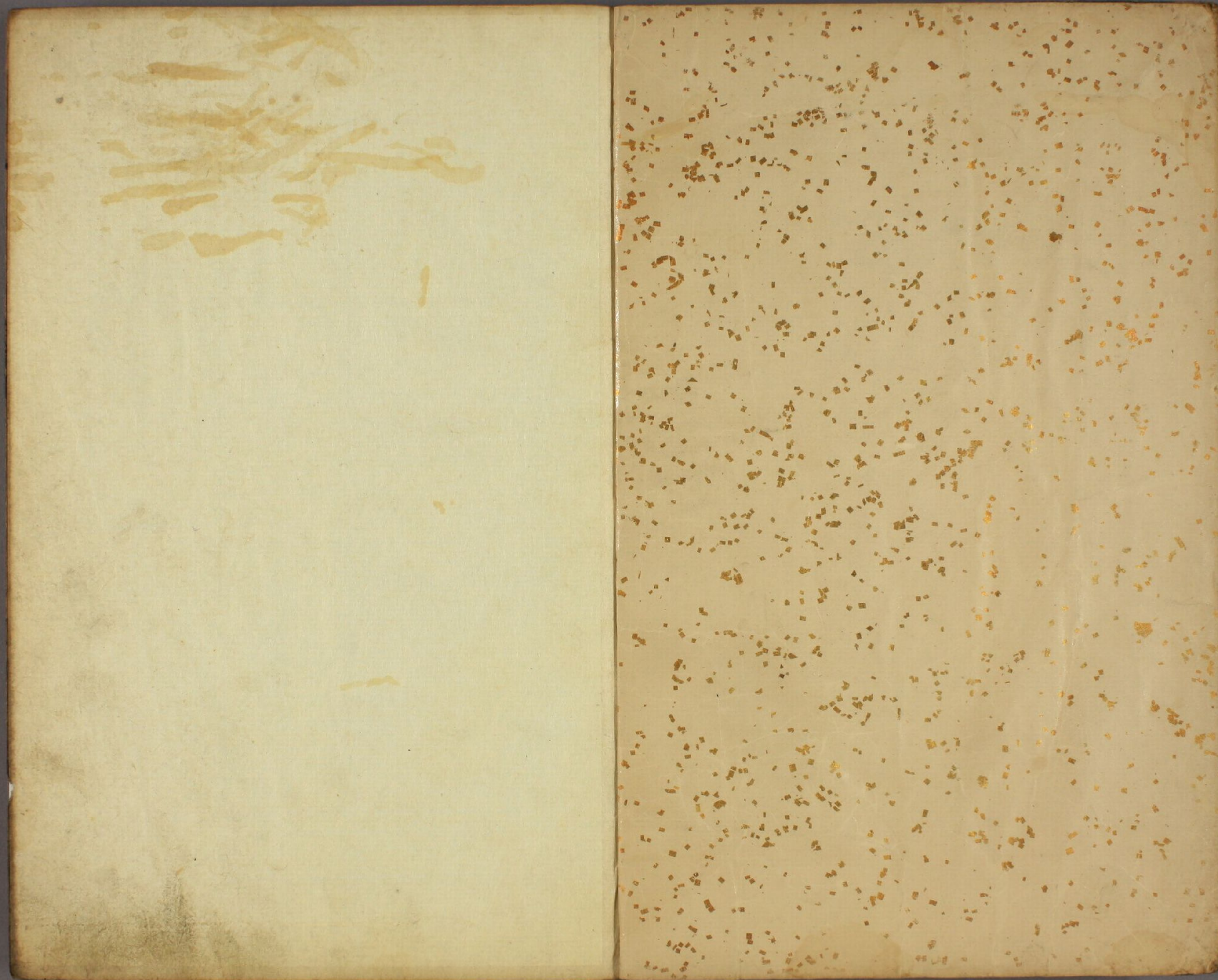




古今秘訣集
下

中村俊定文庫
文庫 18
1017
2







古今和歌集卷第十一

悲歌一

歌一

素性法師

郭公のこゝろのあはれ草花のちかきつゝ

紀貫之

まきのこゝろのあはれ草花のちかきつゝ

在原元方

うの川のあはれ草花のちかきつゝ

在原元方

白波のあはれ草花のちかきつゝ

在原元方

もつりよのあはれ草花のちかきつゝ



はらへとも神もたましむるまじくはらへぬめの涙がらこころ

か せー ちゆうら

なつる涙ぞ神にまをさすに我をまにあらたむらせむ

寛平甲府守の宮のまをさす

板原の朝臣

恋つじくおぬはらふはらふもあまのこせらうらむらん

位のはらふもあまの涙がらこころもあまの涙がらこころ

なつらうらむ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

紀伊守

ららららららららららららららららららららららららら

たをぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はらへとも神もたましむるまじくはらへぬめの涙がらこころ

我家のまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

川の涙はまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

なつらうらむ

あまのまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

板原の朝臣

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

あまのまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

侍のまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

なつらうらむ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

あまのまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

紀實

吾く家後しつ廣衣しつひんまをいんてん

題一ら

うふまをまてしつて海川冬もやぬみまがらりなり
まはるは色病やあふんまをいんてん

素性法師

らうぬあまをいんてん海川のまをいんてん

板原

備の原がやせむうう夜をうびも神を志ぬ

大江

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

我くもあまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

あまをいんてん

あまをいんてんあまをいんてんあまをいんてん

又花林

独一花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

人かさるるは世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

〜花

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

花は世に我が目しるすのそよよとく人かさるる
あつた

身は海にまひりてはなれぬとて
はなれぬ

我をまじりてはなれぬとてはなれぬ
紅のうらみはなれぬとてはなれぬ
白のうらみはなれぬとてはなれぬ

みはなれぬ

長き夜はなれぬとてはなれぬ
あはれぬ

月夜まじりてはなれぬとてはなれぬ
月夜まじりてはなれぬとてはなれぬ
あはれぬ

あはれぬとてはなれぬとてはなれぬ

考之

はなれぬの難波のありてはなれぬ
てはなれぬとてはなれぬとてはなれぬ
あはれぬとてはなれぬとてはなれぬ

あはれぬ

あはれぬとてはなれぬとてはなれぬ
あはれぬ

あはれぬの思ひはなれぬとてはなれぬ
あはれぬ

あはれぬとてはなれぬとてはなれぬ
あはれぬ

あはれぬとてはなれぬとてはなれぬ

みけ祓

こころをたはぶるまじき心をはらひてはらへし思ふまじ
あつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

あつしき心

今もあつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

三心祓

たつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

三心祓

たつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

古今和歌集卷第十三

戀心文

ふよみの心はらひてはらへし思ふまじ
くらくらよ雨の心はらひてはらへし思ふまじ

在原業平の心

あつしき心をはらひてはらへし思ふまじ
業平の心はらひてはらへし思ふまじ

三心祓

はらひてはらへし思ふまじ
あつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

あつしき心

あつしき心をはらひてはらへし思ふまじ

いかにあはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

いかにあはれにうらなひのこゝろに

平貞女

白河のついでにうらなひのこゝろに

平貞女

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

平貞女

あはれにうらなひのこゝろに

平貞女

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

あはれにうらなひのこゝろに

伊勢

あはれにうらなひのこゝろに

古今和歌集卷第九

恋まの口

野らうら

見くらうら

法皇のらうらのおはたけらうら
あひまはらうらまはらうら

はらうら

その神方のらうら申らうら

藤原のたのめ

あひまはらうらまはらうら

伊勢

あひまはらうらまはらうら

よるら

石の如くはるかに遠くまで
流るる水は、今も昔も
変わらぬ。人の心も
同じく、変わらぬ。

山は高く、谷は深く
静かに、人の心も
静かに。静かに、静かに。

花は咲き、葉は茂る
春は来り、秋は去る
時の流れ、人の心も
同じく、変わらぬ。

月が照らす、星が輝く
夜は静かに、人の心も
静かに。静かに、静かに。

思ふに、昔の如く
静かに、静かに。静かに、静かに。

題

小窓の夜も、静かに
静かに、静かに。静かに、静かに。

静かに、静かに。静かに、静かに。

静かに、静かに。静かに、静かに。

静かに、静かに。静かに、静かに。

静かに、静かに。静かに、静かに。

おもひのこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ

大付く落ぬ

思ひのこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ
そのこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ
しづかにせらるる心はかたじけなくしてはらうとぞ
せらるる心はかたじけなくしてはらうとぞ

曲は若原のうらうら

おろめあゝまの葉とてせしめん我あゝまの葉とてせしめん

今もこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ
是れはかたじけなくしてはらうとぞ
玉のこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ

玉のこゝろはかたじけなくしてはらうとぞ

まてとておぼしきものも金おぼしきものも
中細言原のうらまの影長のおぼしきものも
ゆるぎはかたじけなくしてはらうとぞ

田院

おぼしきものも金おぼしきものも

おぼしきものも金おぼしきものも

おぼしきものも金おぼしきものも

おぼしきものも金おぼしきものも

伊勢

みよのこは海をへりてもたつたる人かきかへし思へ

歌一らん

雲林直のみこ

吹まのこも同様にしと結らぬのうらまをともかくはあ

さういふまじ

今やそつとも海をへりてもたつたる人かきかへし思へ

歌一

小野のこ

人かきかへし思へ

なるのこも同様にしと結らぬのうらまをともかくはあ

さういふまじ

さういふまじ

さういふまじ

ゆきもたつたる人かきかへし思へ

歌一

源宗平のこ

ゆきもたつたる人かきかへし思へ

歌一らん

源宗平のこ

唐衣のゆきもたつたる人かきかへし思へ

源宗平のこ

唐衣のゆきもたつたる人かきかへし思へ

源宗平のこ

唐衣のゆきもたつたる人かきかへし思へ

さういふまじ

さういふまじ

さういふまじ

よるんを〜らる

とてはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心
を事のものにたぢりしは人の心とて事とて
さうらふ事とて人の心とて事とて人の心
おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

夕。おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心
を事のものにたぢりしは人の心とて事とて
さうらふ事とて人の心とて事とて人の心
おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

おぼくはなほ思ふ事とておぼくはなほ人の心

しんがのせむしりてしちち海

九好内しりぬ

非を月舟南よるんしんがらんたがびのたきし海を
ちちがうちちりてしちち海

たしん

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

しちちちりてしちち海

と備成はくはるるをばはるるをばはるる

考もんで候へり候へり候へり候へり候へり

有るものうへに於てはるるの若し申す將ては

約を成はるる候へり候へり候へり候へり

よき候へり候へり候へり候へり候へり

はるる候へり候へり候へり候へり候へり

きく候へり候へり候へり候へり候へり

どし候へり候へり候へり候へり候へり

か候へり候へり候へり候へり候へり

まうへり候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

候へり

候へり候へり候へり候へり候へり

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

まらむとて

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

おののくのみ

大江の

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

まらむとて

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

まらむとて

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

まらむとて

おののくのみまらむとて
なまじりていづれは成よ
とて

じつじつとていふにけりしは
 大徳言ふにけりしは
 中納言も成る御事
 ちやゆき御事とていふ御事

此度の御事

色づくとていふにけりしは
 其の神の御事並にけりしは
 神とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは

致真曰後
 幸然言し
 カルカシ
 遠リリ
 オン保言
 寸

する所はけりしは
 御事とていふにけりしは

御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは

御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは

御事とていふにけりしは
 御事とていふにけりしは

屏風の志がらるるはばよらるる

けしき

嗚初し時をもちららるる化をくせにまらるるのや多れにひる

屏風の志がらるるはばよらるる

坂上二程のや

かそそとて同のふれふれなれらるるはばよらるる

うけまじ

古今和歌集卷第十八

雑歌下

野ららる

よる人らる

在申は何ら所のりらるるはばよらるる

しん^世とわら^世我らるるはばよらるる

屏風の志がらるるはばよらるる

小野らるるはばよらるる

ちるまそとらるるはばよらるる

ういのうらるるはばよらるる

けしき

お人らるるはばよらるる

又屏の志がらるるはばよらるる

在中のうまきよはらふる舞ののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

まの海よりよ

ようれちみあはれはるるんま思ふ人うらたてまも
よのちしうまきよはらふる舞

九段問答のの

ら夜捨くもるる人よよまほほおちけし
おちしもさたに

よよ何あひうらたてののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

よよ何あひうらたてののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

おちしもさたに

よよ何あひうらたてののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

おちしもさたに

よよ何あひうらたてののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

おちしもさたに

よよ何あひうらたてののびたよよまほほおちけし
おちしもさたに

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

平らさうん

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

あまのついでに

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

あまのついでに

あまのついでに

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

あまのついでに

あまのついでに...
あまのついでに...
あまのついでに...

くまのよもぎ	あひのさやん	色よそが	今よりいへん
まみぢのめ	ゆづりまね	ひらびら	わらましく
まげさつら	まんまなま	あひのさやん	たらなましく
うらささ	まのそで	まのそで	けりまのそで
あひのさやん	たけのこ	まのそで	まのそで
あひのさやん			

うらささのそでに
あひのさやん

ちんちん	非のり	くれけの	せよまた
ゆまひの	まのり	まのり	あひのさやん
まのり	まのり	まのり	あひのさやん
まのり	まのり	まのり	あひのさやん
まのり	まのり	まのり	あひのさやん

まのり	あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん
あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん
あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん
あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん
あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん	あひのさやん

くまらもが 春もら夜 けえはらん
春の母は遠路のこころにけえはらん
冬のはらけ

九河内船垣

ちんちんち	お正月も	けいりも	くまらも
うらたれ	お正月も	あちあち	けいりも
山あし	お正月も	あちあち	けいりも
こころし	お正月も	あちあち	けいりも
春の母	お正月も	あちあち	けいりも
あちあち	お正月も	あちあち	けいりも
そらーはらけ	お正月も	あちあち	けいりも

七条のこころにけえはらん

伊勢

お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも
お正月も	お正月も	あちあち	けいりも

提頭亭

野一

後人

くらげのこころにけえはらん

七条

七条

寛平御時きよのまけの合つし

友原にまふ

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

平貞女

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれに

あはれにまふしをのまけの合つし

あはれにまふしをのまけの合つし

古今和歌集卷第二十

大弐 取御方

松平かほひらさし

新しき年の始はあけくさうのみまはるるまはるる

後記 日中記六に在るまうらひまうらひの代までよ

あつたをまゝいそひ

うもとくうらひまはるる海雲はるる霞あはるる

あつたあは

あつたあはるるあつたあはるるあつたあはるるあつたあはるる

あつたあは

あつたあはるるあつたあはるるあつたあはるるあつたあはるる

あつたあは

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical passage.

Handwritten text, possibly a title or a specific phrase within the main text.

Main body of handwritten text on the right page, continuing the cursive script.

Main body of handwritten text on the left page, continuing the cursive script.

Handwritten text at the top left of the page.

Handwritten text at the bottom left of the page.

いづれし

けいねん

うほくいままのこゝろをたのむに
在教云下室蟬上

勝長

かきかへしむるはたまたまのこゝろを
なごむまの事友則下

く積久ねも

く好ま

いしむるはたまたまのこゝろを
忍草下利貞下

なまの井もやこゝろ

なまの井もや

なまの井もやこゝろ

うりとの せいり下

うりとの あら

あつら

うたはれどよそめとのこゝろを

いづれしむるはたまたまのこゝろを
あつらしたまふがゆはのあら

桂宮下

巻第十一

奥の菅の根一つぎる君下

いづれしむるはたまたまのこゝろを
あつらしたまふがゆはのあら

巻第十三

教員云粟、假字云向と
泡沫、向は、こゝろ、いづれしむる
や、こゝろ、あつらしたまふがゆはのあら
いづれしむるはたまたまのこゝろを
あつらしたまふがゆはのあら

いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ

いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ

巻第十

いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ

いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ

巻第十

いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ
いさゝかゝるゝ

古今傷物集序

沈澣聖

史和秋者託其根於地發其花於詞林志也人之在世不能專為思慮易遷哀樂相衰感生於志詠形於言是以逸者其痛不怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和史婦莫宜於和秋傷秋有六義一曰夙二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之轉花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發秋理物皆有之自然之理也物而和秋世七代時質人淳情欲無私和秋未化逮于素盡鳴子到出雲雲圍取有三十一字之強今反奇之也其

後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通
 情者。及人代世風大起長歌短歌爭旋頭
 混平之類。雖非一源流漸繁。望於排
 雲之樹。生自寸苗之燧。浮天之波。起於一
 滴之露。玉如新波。津之什歌。
 天皇富緒川之篇。太子或奉開神。雲或
 無入。幽玄。但見上古。多存古質。之語。未
 為日月之能。造為教滅之端。古
 天子每良辰。每京。雅約。良於。宴。送者。歌。和
 歌。君。臣。之。情。由。斯。可見。賢。愚。之。性。於。是。相
 分。取。以。隨。民。之。欲。擇。士。之。才。也。自。大。津。皇。子
 之。初。作。約。賦。洞。人。女子。慕。風。繼。塵。移。後。

漢家之字化。我日域之俗。民業一政。和歌漸
 衰。然於五七。名作。榜中。亦。有。者。云。振。神。如
 之。思。獨。步。古。今。之。間。有。山。邊。亦。人。者。並。和。歌
 仙。也。其。餘。業。和。歌。者。綿。之。不。段。及。後。時。愛
 澆。潘。人。貴。者。有。德。浮。詞。也。與。歌。流。泉。涌。其
 實。皆。為。其。花。孤。掌。也。之。好。多。之。家。以。以
 為。畫。鳥。之。使。乞。食。之。客。以。代。為。活。斗。之。孫。及
 幸。為。婦。人。之。九。難。述。古。史。之。前。述。代。存。古。風
 去。終。二。之。人。然。長。短。不。同。論。以。之。并。也。山。信
 正。尤。得。歌。神。然。之。詞。花。而。女。實。如。畫。畫。好。女
 情。動。人。情。在。原。中。將。之。歌。其。情。之。得。之
 詞。不。是。如。畫。花。雖。少。彩。色。而。有。其。意。者。又

古今集

二

